

令和 2 年 7 月 7 日現在

機関番号：32415

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K17356

研究課題名(和文) 3歳児の「生きられた時間」を探る保育実践研究 - 生活と発達の連続性を問い直す -

研究課題名(英文) Lived time of 3-year-old children in early childhood education and care:
Reconsidering continuity of life and development

研究代表者

横井 紘子(YOKOI, Hiroko)

十文字学園女子大学・人間生活学部・准教授

研究者番号：60557784

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、現象学的視点から3歳児の「生きられた(時間性)」を探り、「いま」の自己が「いままで(過去)」からも「いまから(未来)」からも制約を強く受けないという3歳児の時間性の特徴を明らかにした。また、生活の連続性とは、家庭生活と園生活の同一の経験ではなく、差異を孕んだまま、「いままで」や「いまから」に支えられて「いま」の自己が安定する経験として捉え直された。暗黙のうちに了解されていた3歳児保育の実践知の一端を解明することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義は、発達心理学の知見が主流となっている当該分野において、現象学的方法を用い、子どもの時間概念がいかに獲得されるかといった従来の発達観とは異なる視点で、子どもの時間感覚を明らかにした点である。社会的意義は、3歳児保育の独自性を時間性という視点から解明したことで、5歳児に比べて単に発達の未熟な存在として3歳児を捉えるのではない、3歳児の独自の世界を尊重した保育の実践知を言語化した点である。

3歳児の保育内容の特徴が実践に近い形で整理され、保障されるべき子どもの経験、それを支える保育者の援助の可能性について示すことができた。

研究成果の概要(英文)： This study explored the "lived-time (temporality)" of 3-Year-Old children from phenomenological point of view, and clarified the temporality that "present(now)" self is not restricted by "until now (past)" or "from now (future)". This temporality forms the basis of the characteristics of 3-year-old children. In addition, the continuity of life was reinterpreted not the experience as the sameness between kindergarten and home, but the experience as the stable connection between "present" self and "until now" or "from now" self. A part of the practical knowledge, understood tacitly in 3-year-old class, was explicated.

研究分野：保育学

キーワード：保育学 現象学的方法 生きられた時間 時間性 3歳児保育 生活と発達の連続性 保育実践研究

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

(1) 3歳児の保育の位置づけ

中央教育審議会平成17年度答申『子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について』以降、子どもの生活の連続性および発達の連続性の議論が活発になっている。特に幼児期と児童期の接続を考える保幼小連携の研究が広がり、「協同的な学び」をキーワードに、5歳児の保育内容に着目した実践研究が増加した。しかし、就学前の乳幼児期6年間に、生活や発達の段差がないわけではない。

特に新規に保育・教育施設に入園する子どもの割合が高い3歳児は、家庭生活との連続性が問われる時期である。3歳児は、自我の育ちが目覚ましい時期であり、発達においても一つの節目であると同時に、クラス集団も大きくなり、保育内容も3歳未満児とは区別され、保育の場における生活も変化する。

さらに、単純に5歳児の土台として捉えるだけでは不十分な、3歳児の保育の独自性がある。2007年の中央教育審議会では、幼稚園教育要領は、修了までに達成が望まれるねらい・内容だが、3歳児からの道筋がわかるような構成が必要なのではないかといった意見も出されている。3歳児の保育内容の特徴を整理し、共有していくことの必要性が示されているといえる。

(2) “時間”に着目する意義

OECDの報告書にあるように、保育の質を確保するための評価尺度の開発・検討が世界的になされ、子どもの経験から保育を振り返ることの必要性が提唱されている。その中で、Laeversが開発したSICSの日本版、『子どもの経験から振り返る保育プロセス』では、「安心・安定」と「夢中・没頭」という尺度から子どもの経験を捉えることが提案されている。安心して時、夢中になっている時は、そうでない場合と時間感覚が大きく異なることから、子どもの情態性と時間感覚は密接に結びついていることがうかがえる。

また、3歳児は長期的な見通しを持つことが難しい、遊びがすぐ変わる、などと一般的に言われることから、3歳児と5歳児でも時間感覚は異なる。また、特に入園期の3歳児は、家庭との生活の連続性が課題となっている。3歳時の生活と発達の連続性を議論する上で、生活や発達に密着している“時間”に着目し、3歳児の保育を“時間”から探求することに意義があると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、保育実践の中で暗黙のうちに感覚的に捉えられている「3歳児らしさ」とは何か、3歳児の保育の独自性に対する実践知・経験知を生きた時間（時間性）から明らかにすることである。そのうえで、3歳児の保育で求められる生活・発達の連続性について新たな知見を示すことをめざす。

本研究で明らかにすべき“時間”とは、客観的・数量的に把握される時間ではなく、楽しい時には速く感じたり、退屈な時には遅く感じたりといった、生活と密着した時間の感覚であり、子どもや保育者に経験される主観的な時間である「生きた時間（時間性）」である。「生きた時間」を捉えることは、過去・現在・未来という時間的な次元において、それをどのように生きているのかという、人間の時間的な存在の仕方を捉えることでもある。

現象学では、生活世界と呼ばれるわれわれの前反省的・前言語的な世界における経験の総体を生きた経験と呼ぶ。保育においては、生きた経験の意味を探ることが、保育実践を解明することと同義でもあるゆえ、本研究では現象学的視点から保育実践における生きた時間を探っていく。

3. 研究の方法

(1) 幼稚園と幼保連携型認定こども園の3歳児クラスにおける参与観察

現象学的研究は、前反省的・直接的な仕方を経験される「生活世界」から始めることが基本である。よって、筆者は観察者として保育実践の場に身を置き、子どもや保育者を巻き込んだ出来事に密着し、その出来事の息吹きをありありと感じるといふ、現象学的態度をもって観察に臨んだ（鯨岡, 1999）。子ども・保育者と共にその状況を生きて、相互主観的（間主観的）に捉えられたもの（榎沢, 2004）もメモで残し、後にその意味も包含した形で事例として記録し、蓄積した。

観察は、幼稚園と幼保連携型認定こども園の3歳児クラスで行った。幼稚園では、首都圏内の私立幼稚園において、計27回行った。発達の連続性の観点から3歳児の時間性の特徴が表れやすいと考えられる、①登園直後～遊び出し（遊びはじめや家庭との連続性に着目）、②子どもの自発的な遊び～片づけ～昼食（遊びの移行と展開、遊びから生活場面への移行、みんなで集まる場面での様子に着目）、③いざこざ（その後の流れ、感情や仲間関係に着目）場面に着目した。

幼保連携型認定こども園では、首都圏内の公立こども園において、計5回、観察を行なった。こども園独自の特性として、子どもによって保育時間が異なることがある。よって、生活の連続性によって時間の流れに変化が生じる場面に着目した。いずれも、観察後一週間以内に、筆者の観察記録をすべて園にフィードバックし、園の先生と共有した。保育後の立ち話など、インフォーマルな形での事例の共有も積極的に行い、担任の先生からの話も手がかりにしながら、事例に対する理解をより適切なものへ深化させることに努めた。

(2) 「生きられた時間」に関する現象学的理論の検討・整理

事例を解釈する上で、筆者の理解を拡大し豊かにする手がかりとして、現象学を学問背景とするものを中心に、時間に関するこれまでの理論を検討し、整理することを行った。これらの理論を源泉として、事例をより深く理解することができるようになるだけでなく、理論の積み重ねの中における本研究の位置づけを明確化する根拠とした。

(3) 「生きられた時間」の側面からの事例解釈の深化とサブテーマの検討・体系化

観察における事例の記述は、すでに解釈も含まれるものであり、事例の記述と解釈は一体的に展開することが現象学的方法の特徴でもある。現象学的理論を手がかりにしながら、事例解釈を「生きられた時間」の視点から深化させ、サブテーマを検討・体系化し、研究としてまとめた。

(4) 倫理的配慮

本研究では、保育現場において参与観察を行うため、「人を対象とする研究」となる。勤務先において研究倫理委員会の審査を受け、承認を得た。観察の開始前には、幼稚園および認定こども園の長およびクラスの担任の先生に、研究目的・方法・結果の公表および個人情報の保護についての説明を行い、同意を得た。

4. 研究成果

木村敏 (1982, 2006) をはじめとした現象学的時間論を手がかりに、3歳児の時間性の基本的特徴を明らかにした。3歳頃は、自分が他者（もしくは自分自身）から見られる存在であることに気づき始めるという意味で、自我が確立していく重要な時期として発達心理学的見地からも理解されている。木村は、「時間の誕生と自我の誕生とは厳密に同時的」と述べており、3歳児はまさしく子どもたちに時間が気づかれる時期でもある。保育実践事例から明らかになった3歳児クラスの「生きられた時間（時間性）」の特徴について、研究で明らかになったことを以下に示す。

(1) 3歳児クラスの時間性と自己について

自らの意図とは関係なくいつの間にか物や状況へと巻き込まれていくように遊んでいる3歳児にとって、そのつどの“いま”は子どもたちの意識の対象として客観的に捉えられるものではないことが明らかになった。「何をしているの」といった声かけは、かえって子どもが生きている“いま”の拡がりや興行を表面的なものにしてしまうことが導かれた。

一方、自己についての意識が明確になってくる時期だからこそ、“いま”自分が何をしたいのか、“いま”自分が何をしているのか、他者に宣言したり主張したりする姿も多くみられた。“いま”を意識することは同時に自己を明確に意識することであり、そのことで、“いま”の自分の満足感や葛藤を強く捉えていることが理解された。

3歳児は、おとなからすると一貫性がないように思える言動をすることが多い。その理由として、“いま”の自己が“いままで”の自己（過去性）から制約されたり限定されたりするようにはたらくを強く受けたくないため、“いまから”の自己（未来性）も明確に方向づけられることがなく、人間が本来もっている志向の無限定さが際立っている状態にあることが事例から考察された。つまり、過去性と未来性の二つの方向の時間性のうち、未来性が際立ち、その未来性も無限定であることが、3歳児の時間性の大きな特徴であり、その“いま”を保障する保育者のかかわりの重要性が見出された。自己の同一性の収斂の程度はゆるいが、自己の一貫性は保たれていることも同時に捉えられた。

(2) 3歳児クラスにおける遊びの特徴と時間性について

遊びは、遊びの目的の達成そのものが直線的にめざされているわけではなく、繰り返されるといふ特徴からも、過去・現在・未来といった直線的な現実世界の時間の流れに位置づくのではなく、完了しない“いま”にとどまり続けることが確認された。3歳児の遊びは、前後の文脈に関係なく短時間で移行するなど、直線的な時間をためらいなく飛び越えているかのように捉えられることがあるが、それは、遊ぶ中で無限定に生じる錯綜した志向性をそのつど顕在化したり潜在化したりしながら同時に生きられる時間性にあるからだとして理解できた。

(3) 3歳児クラスにおいて仲間と共に生活する時間性について

「みんなのなかの一人」としての感覚と「みんなの時間」という感覚は同期的に培われていくものであることがわかった。「みんなの時間」を生きることは、時計の時間を守るということではないことはもちろん、仲間が集まる場面で単に静かに座れる、座り続けられる、といった表面的な行動で捉えられるものではないことが導かれた。自発的な遊びの時間を中心として、かけがえのない仲間である一人ひとりと出会う経験とともに、クラス全体に醸し出される雰囲気や感情に自分が同調する経験の重要性が示された。

(4) 3歳児クラスにおける家庭と園の連続性からみた時間性について

入園期の3歳児クラスの子どもが家庭と同様に、園での“いま”を充実して生活するためには、保育者の存在がかなり大きいこと、生活の流れをわかりやすく示していくことの重要性が理解された。子どもたちは、園と家庭とのあいだにある差異を感じながらも、家庭での時間も園での時間も同時に“いま”として現在させる時間性に生きており、家庭とは異なる自己を楽しむ感覚が安定感につながることが明らかになった。

また、ごっこ遊びは、まさしく家庭の時間と園での時間とを一挙に生きる遊びであるということも示された。家庭での経験を幼稚園等で再現するごっこ遊びは、家庭との時間と園との時間のつながりを生きる経験となっているといえる。

子どもが園で安定して過ごすために確保されるべき家庭との生活の連続性とは、環境や手順を家庭と共通化するといったことで実現されるわけではない。園と家庭とのあいだにある差異を感じながらも、生活や遊びを通して、家庭での時間も園での時間も同時に「いま」として生きている。こうした子どもの時間性において、両者の時間は直線的ではない仕方につながっているといえる。子どもが安定感をもって生活することとは、家庭とは異なる時間や自己に出合っても、自己が脅かされることなく、むしろその“異なり”を楽しむような仕方です。「いま」の時間を生き、自己を楽しむあり方をしている状態であることが導かれた。

(5) 3歳児クラスと5歳児クラスの時間性の違いについて

ごっこ遊びにおける役割分担の違いに着目して考察した結果、3歳児は、仲間や遊びのテーマから強く制約を受けることなく、役割を遂行・移行しており、そのつどの“いま”の充実の連続性を楽しむ時間性にあることがわかった。ただし、仲間の存在がわかってきて、自己が揺れ動き、仲間とともに役割をとって遊ぶことに葛藤を覚える時期でもあることが捉えられた。一方、年長児は、仲間の存在や遊びのテーマから自分の行動が方向づけられることを楽しんでおり、自分の行っていることと同時に、仲間の行っていることも同時に生きるといった、共時的な感覚を持っていることがわかった。共時的な感覚は3歳児にもあるだろうが、それを明確に意識していないために制約を強く受けず、役割を容易にまたぎ越すことができると考察された。協同的な遊びや見通しをもって遊ぶことは、時計の時間や線形の時間を理解するというのではなく、むしろ仲間の存在からくる共時的な感覚が背景にあるだろうことが示唆された。

(6) 幼保連携型認定こども園における3歳児クラスの時間性について

ボルノー (1975) のテンポ概念を手がかりに、ものや空間だけではなく、時間性を常に意識し、計画、実践の中で再構成することで、時計時間が多様な生活をする子どもたちに対する質の高い保育の保障へとつながる可能性を示した。物理的に“いま”現前していない自己や仲間・家族との時間的・存在的つながりが、“いま”を支える基盤となることで、“いま”が厚みをなし、安定した自己を形成していくことが導かれた。

本研究で現象学的視点から実践研究を行ったことで、発達心理学からの成果が主流となっている当該分野において新たな視座からの知見を提示することができた。第一に、子どもの時間概念がいかに獲得されるかといった、従来の発達観とは異なる視点で、(1)から(6)に示したような、3歳児独自の時間感覚の特徴を明らかにすることができた。第二に、3歳児保育における生活の連続性とは、家庭生活や園での生活との同一性の経験ではなく、差異性を孕んだまま時間と自己がつながっていく経験にあるといった、生活の連続性に対する新たな視点を示すことができた。

今回の研究では、子ども理解を現象学的視点から深めることが中心となり、明らかになった子どもの時間感覚をふまえてどのような保育援助に結びつけられるかについて可能性を示すにとどまった。今後も、現象学的視点から保育実践研究を継続する中で、保育者の実践知を適切に言語化していくことをめざしていきたい。

<参考文献・引用文献>

- ①「保育プロセスの質」研究プロジェクト (2010)『子どもの経験から振り返る保育プロセス』幼児教育映像制作委員会
- ②鯨岡峻(1999) 関係発達論の構築. ミネルヴァ書房
- ③榎沢良彦(2004) 生きられる保育空間—子どもと保育者の空間体験の解明—. 学文社
- ④木村敏 (1982) 時間と自己. 中公新書
- ⑤木村敏 (2006) 自己・あいだ・時間. 筑摩書房
- ⑥O. F. ボルノー 森田孝訳 (1975) 時へのかかわり. 川島書店

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 横井紘子	4. 巻 第47巻
2. 論文標題 3歳児クラスの時間性と自己についての一考察 - 現象学的視点から幼児の時間性を探る -	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 十文字学園女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 横井紘子	4. 巻 第48集 1号
2. 論文標題 3歳児クラスにおける時間性についての一考察 - 家庭と園の連続性に関する現象学的検討 -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 十文字学園女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 2017
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 横井紘子
2. 発表標題 3歳児クラスにおける時間性を探る - 仲間と共に生活することに着目して -
3. 学会等名 日本保育学会（第70回大会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 横井紘子
2. 発表標題 3歳児クラスの時間性についての一考察 - 認定こども園での生活に着目して -
3. 学会等名 日本保育学会（第71回大会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 横井 紘子
2. 発表標題 3歳児と5歳児の時間性の違いについて - 実践事例の検討から -
3. 学会等名 日本保育学会（第72回大会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横井 紘子
2. 発表標題 シンポジウム「実践研究へのいざない - 実践者による主観を生かした研究の可能性を考える - 」話題提供「生きられた経験の意味を救い出す」
3. 学会等名 日本保育学会（第72回大会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考